

# 稲作情報 準備編 No.10

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

## 適切な種子予措と苗立枯病防除の徹底を！

### 1 種子予措のポイント

#### (1) 浸種

- ① 種子の発芽を揃えとともに種子消毒の効果を高めるため、浸種の水温は10～15℃に保ちます。浸種作業の開始時期は、水温を確保しやすい4月上旬頃からとし、屋外では夜間・早朝に温度が低下しやすいので、種子消毒（浸漬処理）や浸種は屋内で行ってください。
- ② 浸種期間は水温10℃で6～8日間程度とし、種子消毒の効果を高めるため、水の交換は2～3回とします。種子消毒は、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高まった状態で消毒効果が発揮されます。そのため、浸種開始後2日間は水の交換をせず、消毒効果を発揮させます。また、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流しや循環は行わないでください。
- ③ 外観では、当初不透明であった籾がきれいになって、籾殻を透かして胚が白くみえるようになった時が浸種終了の目安になります。
- ④ 浸種時の水量は種子1kg当たり3.5リットル(50kg当たり175リットル)とし、適正水量を維持し、薬液濃度が薄くなりすぎないようにします。

#### (2) 催芽

- ① 催芽は、発芽の種子間差を小さくして斉一に発芽させるため、30～32℃で行います。  
その際、種子袋の内部まで均一な温度になるようにあらかじめ36～40℃の温度で湯通しを行います。
- ② 催芽中は水分を切らさないようにし、芽の長さはハト胸程度とします。芽が長くなると損傷が多くなるほか、播種量のバラツキや播きムラの原因となるので注意してください。品種によって発芽速度が異なるので発芽の程度を十分に観察してください。

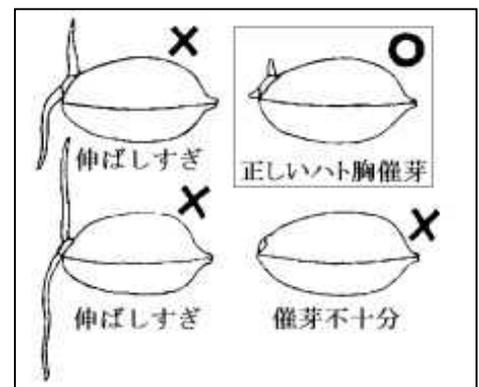


図 催芽の例

#### (3) その他注意事項

- ① 種子伝染性病害の感染を防ぐため、品種や消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種や催芽をしないでください。
- ② 循環式催芽機による浸種及び催芽は、ばか苗病やもみ枯細菌病等の発生を助長するため、使用前後は機械をよく洗浄すると共に、水の交換を行う等の注意が必要です。

## 2 苗立枯病の防除について

苗立枯病は次の薬剤で防除してください。

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍数	散布液量(箱当たり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	10～15g/箱	—	○					
	タチガレースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
			1 L						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500mL	○	○	○			
			2,000倍				1 L		
	ベンレート水和剤	500倍	500mL		○			○	
1,000倍		1 L							
ランマンフロアブル	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	ナエファインフロアブル <sup>1)</sup>	2,000倍		○					
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
ランマンフロアブル <sup>1)</sup>	1,000倍		○						

1) 使用時期は緑化始期までとする。

- ① タチガレースM粉剤は、播種時にダコニール 1000 またはダコレート水和剤をかん注する場合は、播種 5 日前までに混和します。
- ② 床土にオラクル粉剤、タチガレースM粉剤またはナエファイン粉剤を使用しなかった場合は、オラクル顆粒水和剤（播種時）、タチガレースM液剤（播種時または出芽後）、ランマンフロアブル（播種時または出芽後）、ナエファインフロアブル（播種時）のいずれかをかん注します。
- ③ タチガレースM液剤とダコレート水和剤の播種時同時かん注は、薬害を生じることがあるので避けます（生育抑制または育苗後期の葉の黄化）。
- ④ オラクル顆粒水和剤、タチガレースM液剤、ランマンフロアブル、ナエファインフロアブルは、播種時にダコニール 1000 との同時かん注が可能です。
- ⑤ ベンレート水和剤の播種時使用は、いもち病の育苗期防除も兼ねます。
- ⑥ ダコニール 1000 やダコレート水和剤、ベンレート水和剤の播種時処理は、種子消毒に使用するエコホープ DJ またはタフブロックの防除効果を低下させるため、体系処理は行わないでください。

### 3 育苗期のいもち病防除について

本田におけるいもち病発病の主な要因は、育苗期間中にいもち病に感染・発病した苗を本田に移植してしまうこと（持ち込み）です。

乾燥状態で越冬した籾殻や稲わらも伝染源となるため、育苗施設内や近くに稲わらや籾殻を置かないようにしましょう。

茎葉散布剤の農薬登録上の使用回数は少なく、緊急・追加防除の対応が困難となっていることから、育苗期にいもち病の防除を必ず行い、本田へのいもち病の持ち込みを回避しましょう。

#### 【育苗期のいもち病防除】

①**ベンレート水和剤** 500倍液 500ml/箱を播種時～播種14日後までにかん注、または1,000倍液 1,000ml/箱を播種時～播種7日後までにかん注する。

②**ビームゾル** 500倍液 500ml/箱を緑化始期（べた張り除去後速やかに）にかん注する。

注1) ベンレート水和剤を播種時にかん注した場合は、トリコデルマ菌による苗立枯病防除の効果もあります。また、ベンレート水和剤の播種時処理は、種子消毒に使用するエコホープDJまたはタフブロックの防除効果を低下させるため、体系処理は行わないでください。

注2) ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じます。

### 4 水稻育苗直後に育苗ハウスで野菜や花き類を栽培する場合

#### (1) 水稻育苗箱への薬剤処理について

① 水稻育苗後に作付けされた野菜類・花き類において、残留農薬基準値を超過する事案や施用した農薬による生理障害が発生した事例があります。そのため、薬剤の床土混和や播種時覆土前に薬剤を使用する場合は育苗ハウスの外で作業し、薬剤や薬剤を混和した土を育苗ハウス内にこぼさないよう注意してください。

② 薬剤のかん注及び散布時は、育苗箱周辺へ薬剤を飛散させないように注意してください。

#### (2) 水稻育苗箱の下に敷く不透水無孔シートについて

① 水稻育苗箱の下に不透水性の無孔シートを敷き、薬剤が土壤に浸透することがないように対策してください。

② 無孔シートについては、シートに破損等がないか、育苗期間中の荷重に耐えられる素材であるかも確認してください。また、育苗ハウス内の均平と異物除去を行い、シートの破損を防いでください。

③ かん水後の水が無孔シートの外に漏れないようにシートの周囲を高くするなどの対策を講じます。

④ 無孔シートを撤去する時は、無孔シート上の水や土壤などを育苗ハウス内にこぼさないように作業してください。

#### (3) プール育苗の場合について

上記の(1)(2)の遵守に加えて、育苗終了時にできるだけ水を残さないように管理し、育苗終了後にプール内に残った水や土壤等を育苗ハウス内にこぼさないように作業してください。

#### (4) 余った苗や培土の処分について

薬剤を処理した苗や培土を廃棄する場合は、残留農薬や生育障害が懸念されるため、ハウスやほ場に持ち込まず、適正に処分してください。 ◇次号は4月10日頃に発行予定です。